

日本語研修初級コースにおけるアクティブラーニングの取り組み —教室での学びの最大化のために—

橋本 智 福岡 佑子
徳島大学国際センター

1. 徳島大学日本語研修初級コースとは

徳島大学日本語研修初級コースは、日本の大学・大学院に入学予定あるいは在籍中で、日本語未習または初級前半の外国人留学生を対象とした4か月間の集中日本語コースである。受講生が日本の大学・大学院での生活において、必要な情報交換を行い対人関係を維持していくための日本語運用能力を養成すること、各人の専門研究を進めるための基礎的な日本語コミュニケーション力を修得することを目的としている。受講生は月曜日から金曜日まで毎日3時間～4.5時間の日本語授業を受講するほか、課外活動として日本文化体験イベント等に参加する。

2. 課題と対策

日本語研修初級コースの課題として、第一に授業時間の短縮が挙げられる。2013年度には434時間だった授業時間が、予算の関係などで2018年度前期には240時間に縮小している。また、大学院での研究は主に英語を用いて進められることから、日本語学習と並行して専門の研究に取り組む受講生が増え、以前ほどの授業時間を確保することは難しくなっている。授業時間の削減は授業の会話練習等に割く時間の削減に繋がり、本コースの目的である日本語運用力向上への影響が懸念される。こうした事情を踏まえ、現場の教師には限られた授業時間の中で教室での学びを最大化するための工夫が求められている。

そこで2018年度前期日本語研修初級コースにおいて、アクティブラーニング導入の一環として一部反転授業を取り入れた授業実践を行った。反転授業は一般的に授業前に講義動画を視聴し、授業時間には練習問題や課題に取り組むことを指

すが、今回の日本語研修初級コースでの取り組みでは、授業で取り扱う項目のうち語彙学習にのみ反転授業を適用した。授業で扱う予定の語彙を受講生に予習させることで、これまで授業時間内に行っていた新出語彙の導入時間を会話の練習等に充てることを目指した。具体的には、『みんなの日本語 I・II』1～50課の語彙イラストを作成し、各課ごとに動画を作成した。動画にはイラストと語彙の表記、そして音声が含まれる(図1)。受講生には事前に学習予定表を配付し、各日の学習予定課の語彙動画を授業前に視聴することを求めた。



図1 語彙動画の一部

また、受講生の語彙の定着状況を確認する目的で、授業冒頭に実施する語彙の小テストも新たに作成した。小テストはディクテーション2問、語彙の選択問題8問で構成されている。

3. 2018年度前期の取り組み

2018年度前期日本語研修初級コースは2018年4月9日から8月6日にわたって実施し、計6名の外国人留学生が参加した。国の内訳はモンゴル4名、中国1名、タイ1名である。このうちタイ人留学生1名は日本語既習者だったことから、他の受講生とのレベル差を考慮してコース開始か

ら1か月後からの参加とした。

受講生は240時間(タイ人学生は141時間)の日本語研修初級コースを修了し、試験の結果6名中5名が中級レベル、1名が初級後半レベルに到達した。

4. フィードバック

2018年度前期日本語研修初級コース終了後に、受講生及び担当教師からフィードバックを回収した。受講生6名のうち、3名に対しては対面でのインタビューを、残りの3名に対してはオンラインでのアンケートを実施した。また、日本語教育研修初級コース担当教師5名のうち、語彙イラスト及び動画、小テストを作成した2名を除く3名に記述式のアンケートで今回の取り組みに対する意見を募った。

(1) 語彙動画での予習の有効性について

受講生6名全員が語彙動画での予習が効果的だったと回答した。理由としては文字表記に加えてイラストと音声で語彙の理解・暗記に役立ったという回答が目立った。

担当教師も全員が予習動画は概ね効果的だったと評価したが、受講生の予習への取り組み方によって効果の差があったという指摘も出た。特にコースの後半で、予習を怠る受講生が出てきた際に、毎日欠かさず予習をしてくれている受講生と語彙の定着率に差が生じたことも事実である。

(2) 授業冒頭の小テストの有効性について

受講生・担当教師双方から小テストは効果的だという回答を得た。受講生の理由としては、「テストがあるから予習をする」という意見からテストが予習の動機に繋がったことがわかる。担当教師からはテストによって予習を促すことができ、また授業冒頭にテストを実施することにより、緊張感が生まれ以前より遅刻者が少なくなったという意見が聞かれた。

(3) アプリや動画などのe-ラーニングを積極的に取り入れるべきかどうか

受講生6名中5名と担当教師全員がe-ラーニングへを積極的に導入してきくべきだと答えた。受講生からはやさしい日本語で書かれたオンラインニュースや映画などを利用した新たなe-ラーニングへの提案が出た。担当教師は、e-ラーニングが受講生の継続的な自主学習を手助けするという理由からe-ラーニングに対する肯定的な意見に繋がっていることがわかった。

5. まとめと今後の課題

受講生・担当教師のフィードバックから、日本語研修初級コースでの語彙動画を使用した一部反転授業の試みは概ね肯定的な評価を得たと言える。今後は受講生の予習の取り組み方に差が出ないように、受講生に予習を定着させる工夫が必要である。

コース全体の改善点としては、担当教師からのフィードバックの中で、受講生の漢字学習に対するサポート体制が挙げられた。現行では平仮名・カタカナ学習に続いて漢字学習が始まり、授業時間の10分程度を漢字の導入に充てている。しかし、漢字の習得は学習者の自主学習に係るところが大きく、定着率に差が出てしまうことも度々ある。語彙学習と同じく、今後は受講生が自主的に漢字学習に取り組み、授業では小テストなどを通して定着具合をこまめに確認していくなどの工夫が必要だと考えられる。

参考文献

- 坂本正・ほか編(2008)『多様化する言語習得環境とこれからの日本語教育』スリーエーネットワーク。
- 古川智樹・手塚まゆ子(2016)「日本語教育における反転授業実践—上級学習者対象の文法教育において—」『日本語教育』164号 pp126-141.
- 水谷修・李徳奉(2002)『総合的日本語教育を求めて』国書刊行会。